

ともに 歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔を。暗闇に立ちすくんだ時、この記録が足元を照らす光となるように。そしてまた明日の朝を迎えられるように。朝日新聞社員がつづる。

9月号、11月号、2016年1月号では、「子どもたち」特別編をお届けします。その間の「明日の風」は休載します。

子どもたち あの日、帰らぬ旅に出た 子どもたちの記憶を刻みます

美谷島健ちゃん「1985年8月12日当時9歳」 祈る場所はぜつたいに必要なだと思います

日本航空123便（ボーイング747型機）が墜落し、520人が犠牲になった事故から30年が過ぎた。犠牲者の1人、小学3年生の美谷島健ちゃんを訪ねて、2015年8月、日航機の最後の地・群馬県上野村の御巣鷹山へ、東日本大震災で子どもをなくした親たちがやってきた。今回は石巻市で次女を亡くした父親の慰霊登山を綴る。

真夏にしては、思いのほか清々しい日よりだった。

8月12日、群馬県上野村。御巣鷹の尾根へ続く道を、大勢の人々が列をなして歩いて行く。

昨年は雨模様で、路面もぬかるんでいたが、今年は涼しい風が吹き、ずつと登りやすい。節目の年でもあり、山

お盆前のこの時期に遠出は難しい。

昇魂之碑のまわりには遺族や支援者の人々、大勢の報道陣が詰めかけている。日航機事故の遺族による「8・12連絡会」の事務局長を務める美谷島さんは忙しく駆け回る。降洋さんもあえて声をかけようとはしない。言葉を交わさなくても、この場所では互いに通じ合っているように見える。

墜落事故で黒く焦げ、今も立っている樹木に手をかけながら、つぶやくように言った。

「30年たつてこんなに残ってるなんて。自然はずごいね」

東北の被災者にとって、3月はつらく悲しい季節だが、春になれば桜は咲き、緑が生い茂る。

「人間がちっぽけなのか……」
そして語る。

「これからの大川、どうしたらいいか。毎年ここへ登ることで、見えることもあるのでは、と。30年、長かったでしょう。大川のこれからの30年が、頭をよぎりますね」

各地の遺族たちと

美谷島さんが降洋さんの手を引くようにして、ほかの遺族たちに引き合わせた。

8月12日の御巣鷹は、JR福知山線事故など、各地で起きた事故や災害の犠牲者遺族が集う場所にもなってきた。昨年の御巣山噴火の遺族が、降洋

道に連なる人の姿は多い。

紫桃降洋さんの背中で、黄色いひまわりの花束が揺れていた。石巻市から大切に携えてきた。

「これを届けるために、来たようなもの」と降洋さんは言う。

降洋さんの住むのは北上川南岸の石巻市福地。家の庭に咲いた花々を手向けるために摘んできた。

月命日夜の電話

2年前の2013年8月11日夜、降洋さんから私は突然の電話をもらった。「今、上野村にいる。明日、御巣鷹に登る」

事故から28年になる日に合わせ、慰霊登山に向かうのだという。電話があったのは、東日本大震災から2年5カ月の月命日だった。

降洋さんの次女、千聖さんは震災の

さんに声をかけた。

「初めて来ました。御遺族のつながりがあるというのを美谷島さんに教えていただいた。みなさんにお会いできてよかったです」

降洋さんは「遺族同士で分かち合っていくことができます」

思いは共通している。降洋さんは「家族から遺族に変わったとき、それが自分では理解できない。家族だったのに、『遺族』って周りが言い出す。それがなかなか受け入れられないんです」という。

報道陣の取材を受けるときにも、質問のされ方によっては、その思いが激しい抵抗感に変わることは常にある。美谷島さんは「事故の遺族たちが30年間歩いてきた姿が、ここに集まった人たちをつなげている」という。

御巣鷹の30年は、遺族たちの歩みとともに、地元・上野村の人々の支援や、事故の当事者である日本航空の協力や足跡でもある。地元の人々による慰霊のための楽器演奏や尾根へ続く道の整備にも現れている。

それは大川のこれからの歩みにもつながる。

大川でいま、論議になっているのは被災校舎を保存するかどうか。教訓を刻む「学びの場所」として、子どもたちには楽しかった思い出の場所として保存を願う声がある一方、見るのはつらい、負の遺産になる、など解体を求

時、石巻市大川地区にある大川小学校の5年生だった。学校のあった釜谷地区は、北上川沿いの低地。あの日、津波は川を遡上して学校一帯までを襲い、千聖さんは大勢の級友とともに犠牲になった。

学校だけで犠牲者は児童74人、教職員10人。大地震から津波の襲来まで、避難するだけの時間は十分にあったのに、川から水がふれ出す直前まで、校庭で待機を続けたことが、被害を広げた原因だった。

学校における大惨事の原因を究明するため、専門家らによる検証委員会をつくることが決まり、文部科学省が石巻市の予算を使う形で、2013年2月、「大川小学校事故検証委員会」が設置された。その委員の一人が、日航機事故で次女の健ちゃんを亡くした美谷島邦子さんだった。

める声もある。心ない

一部の見学者の態度も無関係ではない。

結論はまだ出ない。降洋さんは「個人的なことかも知れないが」と前置きして絞り出すように語った。

「4年たつて記憶が少

しずつ薄れている部分もあるんですよ。震災後、改めて学校へ行つて、机や腰掛けを見たりして、もう一度、学校での子どもたちの様子が思い出されるような感じがするんです」

これからの30年——校舎がなくなり、記憶が薄れてしまったら、という不安は消えない。「時間ってこわいですよね」日航機事故では墜落した機体の残骸を残すかどうか、論議があった。

「アンケートをとると、『二度と見たくない』という意見から『社長室に置いて残せ』という意見までありました。私にも見たくない思いはある。でもなくなってしまうたら、それで終わりなので」と美谷島さん。機体はいまも保存され、安全のための教訓を伝える。

御巣鷹の尾根も大川小学校舎も、多くの人が手を合わせに訪れる。美谷島さんは「祈る場所は絶対に必

できれば美谷島さんにお会いして話したい——。石巻から車で8時間。宿の予約もせぬまま、夜、疲れ切つて上野村に到着した降洋さんが倒れ込むように入った宿舎で、そこに宿泊していた美谷島さんとお会う。

しばし語り合ったという。大川小でのこと、千聖さんのこと。胸に秘めた思いを伝えた。

降洋さんが御巣鷹に登るのは、あれから3回目だ。

尾根にたどり着くと、「昇魂之碑」にひまわりを供え、手を合わせる。そして目指すのは、健ちゃんの墓標。

祭壇に野球ボールが置いてある。白い球面に「一意専心 田村健太」の文字。4日前、ここを訪れた田村孝行さん、弘美さん夫妻が美谷島さんに贈ったものだ。二人の長男、健太さんは震災の時、女川町の七十七銀行支店で津波に襲われ、犠牲になった。かつて高校球児だった。

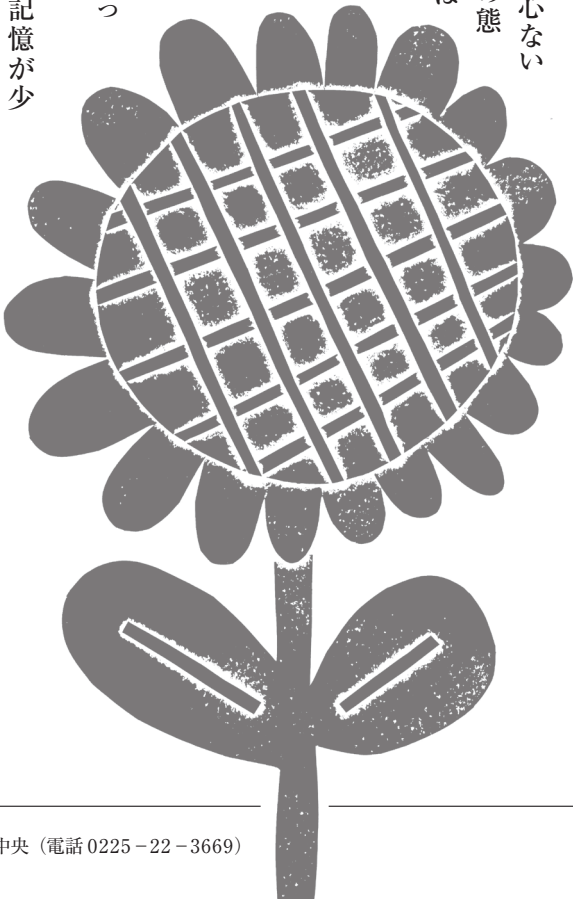
降洋さんは平たい形の線香に火をともす。燃えながら文字が浮かび上がるそう、妻のさよみさんが「私は行けないから」と用意したのだという。さよみさんの両親は今年、亡くなった。

要。やはり場所ね。それが心のよりどころになるし、次に伝えられるし」
伝えるということ——。日航機事故の遺族、関係者の歩みは、全国各地で起きている事件、事故、そして災害の伝承にも通じる。

「日航機事故の遺族が伝え、供養を続けていること。大川での子どもたちの犠牲、しかも学校事故の犠牲と命の尊さを伝えていかなければ。もつと遺族で話し合つて、きちんと伝え、供養していきたい」

降洋さんの口から「30年の歴史」という言葉がもれた。33回忌が訪れる2年後までは、御巣鷹の慰霊登山を続けるつもりだ。

美谷島さんは言う。「私たちの山に来てくれて、感じる人があんならば、それは30年間、いろんな人があの山で流した涙がそこにあるからだと思う」



雄勝巡礼

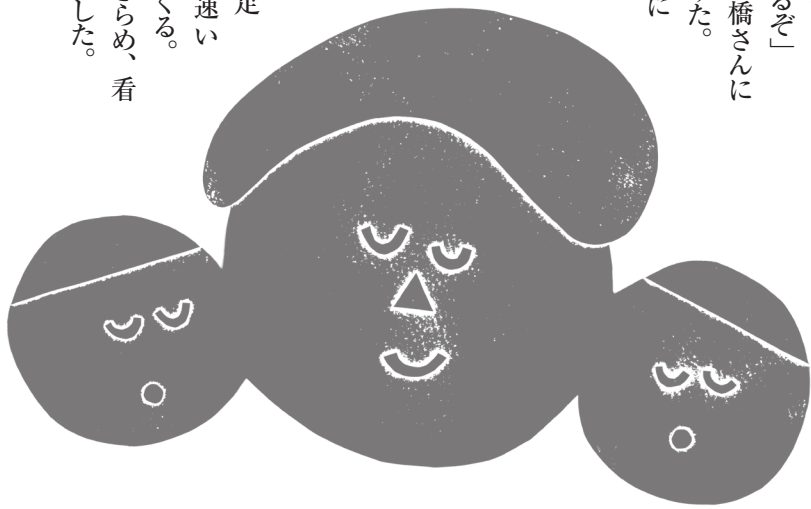
石巻市雄勝町の港そばの雄勝病院の話から始めよう。

[第11回]

正職員3人「患者を」水迫る階下へ

前夜の雪が軒先や道路脇に残り、澄んだ空の下で輝く。まぶしい朝だった。昼に気温は5度まで上がる。前日より4度高かった。病棟は最上階の3階にあった。40床のベッドは満床だった。入院患者の平均年齢は84歳。午後、曇り始めた。そして――。病院にいた職員28人のうち24人と、40人の入院患者全員が犠牲になった。のちに救助された職員4人のうち、当時37歳だった看護師の話を今回と次回に分けて記す。ここでは彼女をDさんと呼ぶ。Dさんは新館3階にいた。末永三和子看護部長(当時59)と4人部屋の321号室で、患者の血圧と熱を測ろうとした、その時だった。激震だ。立ってられない。ベッドの柵にしがみつき、「大丈夫だからね」と男性患者(当時83)に声をかけながらも慌てていた。彼が「すぐおさまるから大丈夫

夫だ」と笑顔で返してくれた言葉に、ほっとした。揺れは長かった。本震後、各部屋を見て回る。患者の手足を洗うための洗面器の湯がこぼれ、床は水浸しだ。看護部長は、廊下を渡り、本館の病棟へ急いだ。本館前には防災行政無線のスピーカーが立っていた。放送が始まり、音は館内にも届いた。内容は聞き取れなかった。3階のナースステーションへ。看護師の高橋初枝さん(当時51)、薬剤師の鈴木一男さん(当時43)と看護助手らがいた。窓から病院前を見下ろす。駐車場に薬剤部長の山田朗さん(当時57)がいる。山田さんが声を上げた。「支所のほうに車を移動してあげる。カギを投げて」Dさんは車のカギを投げて言った。「上、大丈夫ですよ」窓から海も見えた。水が県道脇の防潮堤を越え



て路上へあふれでてきた。浴槽から水があふれるように。(えー。津波なんだよねー)目を丸くした。「屋上へあがれ」鈴木孝壽副院長(当時58)の声が出た。逃げなければという切迫感はなく、屋上に出た。病院前の駐車場にも水が流れていた。水かさが増す。「患者を屋上に上げるぞ」副院長がDさんと高橋さんに告げ、階段を駆け下りた。副院長は看護助手には声をかけなかった。あとになってDさんはこう考える。正規職員ではない助手に危険な仕事は任すべきでないと思断したのである。階段脇の321号室へ。まず1人を運ぼうとベッドを囲む間、足元に水が流れ込み、速い勢いでひざへ上がってくる。副院長は搬送をあきらめ、看護師2人を屋上へせかした。

鈴木孝壽副院長、皆に声張り上げ

新館屋上には、階段の出入り口からも、周囲のへりからも水が押し寄せた。あつという間だった。そんな記憶がある。Dさんはパニック状態に陥っていた。水に浸かっている意味がのこめず、どうしたらいいかわからない。息継ぎに必死だったことは覚えていた。家が流れてきた。

「屋根につかまれ」副院長のその声は、まるで怒鳴るようだった。副院長自身は別の屋根に乗り、動けずにいるDさんへ叫んでいた。「タイヤにつかまれ」その通りにつかまる。「屋根に乗り移れ」そうしようにもまた滑り落ちる。副院長が怒鳴る。「靴をぬげ」その通りにぬぐ。それでも滑り落ちた。副院長が叫ぶ。「靴下をぬげ」あの指示がなければ動けなかった。そうDさんは振り返る。素足で這い上がった屋根に、もう1人、事務職員の牧野まり子さん(当時40)がいた。近くの屋根には副院長や看護師の高橋さんたちがいた。振り向くと、看護助手の永沼顕さん(当時23)が、新館屋上の出入り口のドアの上に乗って出入り口を開く塔屋につかまっていた。海中に病院が沈んだような

光景だった。

電信柱などが次々流れてくる。「頑張れ」と副院長が皆に声を張り上げていた。引き波が始まった。

事務員牧野まり子さん頬を寄せて

雪が降り始めた。視界を失った。吹雪だ。体に雪が積もる。手足の感覚がなくなり、動かさなくなってきた。「寒いね」と言い合い、2人で声を上げた。「助けてー、助けてー」同じように「助けてー」と叫ぶ人々の声が聞こえた。姿は見えない。「だれー」と呼び返す気力はない。まり子さんと話すのが精いっぱいだ。

沖へ。両手で屋根にしがみつき、まり子さんと言葉を交わした。「これ、夢なんだろうか」「何が起きているのかな」

「だれか助けに来るよね」「へりが来るよね」「必ず救助に来るよね」そう話しているうちに、日は傾いていく。「いつになったらへりの音が聞こえるのかな」「もしかして、ここだけじゃなくて、すごい状態になっているのかな。だから救助に来ないのかな」両手で屋根にしがみつく。(海に落ちたら最後だ)そう覚悟した。津波は何度も押し寄せ、その

つど、ほかの家屋がぶつかってく。地鳴りがする。ボンベから噴き出したのか、ガスの臭いが漂う。海面は所々渦巻いている。(あの渦に巻き込まれたら終わりだな)と思った。薄暮の中、小さな船が流れてきた。

「あの船に乗らないとだめだね」。Dさんは、まり子さんに言った。船は2メートルほど先だ。自分がそこまでどうしてたどりつけたのか、覚えていない。船に乗って声を上げた。「まりちゃん、乗らないと、だめだから。頑張つて乗って」まり子さんは、Dさんの3歳上の兄の同級生。

Dさんはワンピースにカーディガンだが、まり子さんは上着を羽織っていた。それが水を含んで重くなっていたのか。機関室は見当たらない。ロープがあった。それを投げた。「つかまって」まり子さんを引き寄せた。流れてきた発泡スチロールを拾い上げ、体の周りに並べた。互いを暖めようと抱き合った。睡魔が襲う。「寝ないで」どちらかが寝入れば、どちらかが話しかけて起こす。「へり飛ばないね」「いつになったら助けに来るのかな」「きつと来るよね。大丈夫だよ」

「大丈夫だよ」。そう言うと、まり子さんはDさんのほおに自分のほおをあて、Dさんのひた

いに自分のひたいをあてて、また言った。「寝ないで。大丈夫だよ」そのぬくもりに安心感がわいてきた。Dさんは振り返って思う。まりちゃんはいつもあんなふうの子どもたちとほつぺたを合わせたり、おでこを合わせたりにしていたのかな。

寝入る時は心地よく、寒気をまったく感じなかった。が、めざめた途端、体がガタガタ震え出すほどの寒さを覚えた。次に目がさめた時、あたりは明るくなっていた。へりの音がする。確かに聞こえる。だが機影は見えない。海面は家の材木などの漂流物で埋め尽くされている。その先に「奇跡」を見た。

全国的に再稼働の時「使用済み燃料どうする」

女川町議会は2014年夏、1泊2日で福島県の福島第一原発事故の被災地を視察した。初日に訪ねたのは浪江町。原発が立つ大熊町と双葉町に隣接し、全町避難中だ。2日目、約100キロ内陸の会津若松市へ。大熊町の出張所を訪れた。

大熊町議らの説明を受け、女川町議の高野博氏(72)は2点尋ねた。

1点目は「オフサイトセンター」について。法律上、ここを現地対策本部として国や電力会社は事故対応する。大熊町では原発から約5キロ先にあったが、震災時は通信回線が不通になり、放射線量が上昇し、震災から5日目には撤収した。

高野氏が「役立たなかったと言われて」と切り出すと、大熊町企画調整課の池沢洋一課長(58)が答えた。

「こういう過酷事故を想定していなかったんだと思います。換気扇はふつうの換気扇で、出入りの時に汚染物質を取り除いてから入るとい装置になっていない。当然、逃げるしかないという状況になったと思うんです」

もう1点、高野氏は原発再稼働の動きについても投げかけた。「福島の原因の究明が途中のまま、全国的に再稼働となった時、国の責任が遠のく心配は。皆でふるさとへ戻るにも『国の責任ではないので各自自治体でやってください』となりかねないのでは」。共産党町議の高野氏自身は再稼働に反対だ。

池沢課長は賛否には触れず、「私どもでは『3年3カ月経った今もこうなっている』と事実を見ていただく以外にない」と語ったうえで「ただし」と続けた。

「福島県内の中間貯蔵施設の廃棄物は今後どこに行くのか。全国の使用済み燃料、使い続けている途中の燃料はどうするのか。その問題は何一つ片付いていない。昔から出る話ですが、『トイレなきマンション』をきちんと考えないと。経済成長ばかりに目が向いていて。基本的に押さえなければならぬところを押さえる議論が必要ではないかと思う」

15年春。高野氏は大熊町の国道6号を車で通った。走行中の車内で放射線量は女川町の約100倍の値を示した。4年8カ月経った今も続く被災を受け止める。